

詩編 85 編1～14 節

詩編 85 編は伝統的に待降節に読まれてきました。恐らく最終節の「主の道を備える」が、洗礼者ヨハネについて引用されたイザヤ書の言葉を連想させたからでしょう(マルコ 1:3, イザヤ 40:3)。この詩編の冒頭は捕囚に関わるので、第二イザヤの時代に近い作品かもしれませぬ。ただ通常の方

析法からはイザヤ書が後の文書だと言われます。そうだと、この詩編をイザヤが活用し、誰かが洗礼者ヨハネに適用し、それをまた福音書の記者が引用したということになります。ある種の信仰のたすき掛けが確認されます。

聖書の信仰は、言われたことを暗記、模倣するような再生産を求めているわけではありません。神の意を受けたと信じた人が、それぞれ遣わされた場で、それをどのように展開するかが大切にされてきました。そして神は人のその営みを見ておられると考えられてきました。創世記の物語やイエスの譬にも、そのモチーフがあります。神は見ておられるのです。

詩編 85 編を一読すると、詠われた時期や環境について、少々混乱を覚えます。2-4 節が完了形で捕囚解放の喜びを語っていると思える一方、5-8 節の嘆きは、作者がなお捕囚の最中にあると感じさせるからです。前半はある種の教義、後半は作者たちの現状と考える人もいます。いずれにしても、作者はなお解放されておらず、神の「慈しみ」を願い求めています。その中で作者は、自暴自棄に陥らず、「平和」(シャローム)を語る「主の言葉を聞こう」(9 節=直訳)と申します。それが「主の慈しみを求める人」すべてに向けられていると確信するからです。そうして新しい語彙が、以前の語彙に導かれて出てきます。神の送る「慈しみ」と「まこと」、「平和」と「正義」が出会います(11 節)。私どもにはこの出会いがそれ自身の努力によって実現したと映りますが、作者は注意深く、「地」と「天から」(12 節)、つまり自身の力によるのではなく、神がお与えくださるのだと述べます。神はご自身の働きに参与する人を新たに招かれます。

アドヴェントは、神が私たちが放置しないとの使信を学ぶ機会です。さらに「主の道を備える」業に参与するよう招かれていることを覚える機会です。そして「愛の業に励みつつ」主の再びの到来を待つ信仰を体得したく存じます。また次世代へのたすき掛けも心にとめたく思います。